七十五年米國交際文書

日本政府在留官吏往復之部

第壱號

195
1-3

114
A 4436
1

第三十四号

第百四十二号〇ウヰルレムス氏ヨリ
フイス氏ヘ贈ル書翰

京都帝國大學圖書

千八百七十三年一月十日附第二百二十一号ノ
書翰ニロウ氏ハ米國人民ニ日本ノ武官ヲ交
際官ノ職ニ即クヲ許ルスカ為ノ恐クハ損害紛
紜ノ生ス可キ旨ヲ辨シ又四月三日附貴下ノ返
書ニ貴局ハ法律ニ從ヒ米國人ノ外國ノ官職ニ

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

即クヲ制スヘキ權力ナキ旨ヲ辯シ給ヘリ而シ
余ハ此二書翰ノ趣旨ニ付キ余カ最終ノ書翰ニ
記セル面會ノ節之レアリシ談話ノ委細ヲ今左
ニ貴下ニ上申ス
抑支那ノ官吏ハ日本人ノ臺湾ニ攻來レルヲ以
テ敢テ自カラ交戰ノ宣告ニ當ルヘキ程ノ事ト
ハ思ハサリシニ米國ノ士官及ヒ船舶ノ日本人
ニ傭用セラルヽハ天津條約第一條ノ真意ニ反
ケル旨ヲ論シ而メ一箇ノ問ヲ起シ來テ曰ク元
来右條約第一條ハ若シ他國ヨリ支那ニ向ヒ不
正苛刻ノ擧動ヲ為セル時ハ米國其ヲ國間ニ入
リテ之レカ為メ勸和ヲ取計フベキ旨ヲ定メタ
ルニ今米國ハ如何ニシテ其國人ニ日本兵ヲ援
ケ且ツ其兵ヲ指揮スルヿヲ容ルシ得ヘキヤ縱
令又右ノ條中ニ斯ク分明ニ其趣旨ヲ載セサル
モ米國政府ノ其國人ニ右ノ許容ヲ為スハ其條
ノ本旨ニ從ヒ不正苛刻ノ擧動ヲ差留メ妨ケセ
シムル(縱令之ヲ抑制セサルニモセヨ)ヿナク切
テ其不正苛刻ノ擧動ニ同謀スルカ如キ姿アル
ニアラスヤト因テ余ハ之ニ答ヘテ右條約第一

條ノ訣氣ヲ以テ考フル時ハ元來米國ハ其人ニ
苛刻ト云ヘル無動ヲ自カラ幾許カ裁斷セサル
可カラサルヲ知ル可シ米國ハ其情実道理ヲモ
考究スルヿナク且ツ其譯柄ヲモ知ルヿナキニ
徒ラニ該支ニ干渉スヘキ旨ヲ定メタルニハア
ラス其語気ニ因レハ先ツ該事ノ模様ヲ十分ニ
穿鑿スヘキヿノ必要ナルヲ知ルヘキニ此回ノ
如キハ支那官吏等日本政府ヨリ其意志ヲ辨明
スル報告ヲ受ケサル旨ヲ自認シタレハ右ノ條
約箇條ハ此回ノ事ニ適用シ難キ旨ノ言ヒ然ル

後余ヨリ去年副島ノ北京ニ来リシ時其事ヲ論
議シタルヤ否ヲ支那官吏ニ問ヒシニ支那官吏
之ニ答ヘテ副島ハ其政府ノ兵ヲ臺湾ニ発遣
シテ其地ニ據ラシムル旨ニ付キ何旨ヲモ語リ
シヿナク且ツ臺湾生蕃ノ為メ日本臣民ノ蒙リ
シ害ノ如キモ敢テ之ヲ論議シタルヿナキ旨ヲ
言ヒシカ方今衆庶ノ通知スル所ニテハ當時右
等ノ諸事ニ付キ種々ノ論議アリテ既ニ六月十
三日附ノ「ロウ」氏ノ書翰第二百六十四号中ニモ
當時日本使節ハ自國ノ被リシ害ヲ述ヘ且ツ文

那ニ於テ此事ニ付キ何等ノ處置ヲモ為サ、レ
ハ日本ヨリ自ラ其害ヲ補償スヘキノ意ヲ述
ヘシヿヲ記セリ
次キニ支那官吏余ニ向ヒ若シ日支両國間ニ交
戰ノ起ルヿアリテ敵兵ノ隊中ニ在ル米國人ヲ
支那兵ノ殺傷スルヿアラハ其政府ハ如何之ヲ
處置スヘキヤト問ヘリ曰テ余ハ之ニ答ヘテ凡
ソ日本ノ兵籍ニ入ル米國人ハ其危難ヲ自ラ
已レニ擔當スルニアレハ縱令其殺傷セラルヽ
モ米國政府ハ之ニ頓着セス而メ敵兵ノ隊中ニ
在ル各人ハ支那ニ於テ之ヲ其國敵ト看做スヘ
キ旨ヲ言ヘリ
支那官吏ハ此方向ニ於テハ更ニ續テ問ヲ為ス
ヿナク、、、、、、因テ余ハ右樣ノ事アル毎ニ西洋
各國ノ習慣ト為ス所ノ確固タル解明ヲ得ント
セハ宜シク惠頓氏ノ万國公法譯書ヲ參考スヘ
キ旨ヲ告ケタリ然レモ當時余輩両人共ニ右ノ
習慣ハ條約書中ニ定メシ領地外ノ權ノ為メ頗
ル其姿ヲ変シ殊ニ兵事ニ付テハ最モ其姿ヲ変
セルヿヲ覺ヘタリ

又支那官吏ハ平和ノ業ニ米國人ヲ傭使シ又然ノミナラズ自國臣民ノ乱ヲ鎮定スルニ米國人ヲ傭使スルハ米國人ノ日本兵籍ニ入リテ支那ニ向ヒ交戰スルトハ大ニ其姿ヲ異ニセル旨ヲ述ヘ且ツ支那ニ於テ日本ト戰フ為メ外國人ヲ傭使スルモ亦之ト同シキ旨ヲ認メタリ蓋シ右支那官吏ノ論ヲ以テ考フル時ハ其官吏ノ此事ニ付キ思慮アルヲ知ルヘク其論モ果シテ其理アリト雖モ其侭之ヲ論議スルヲ止メタレハ支那官吏ハ強テ其論ヲ継續スルヿノ意ナキヿ明白ナリ

余ハ上文ニ記セルロウ氏カ書翰中ノ論理ニ付キ更ニ其理ヲ確固タラシムヘキ説ヲ加フル能ハスト雖モ抑〻支那人ノ嘗テ外國人ニ右自治ノ大權セルフ、ゴウヲ許ルセシ頃ハ其大權ノ品質ルンメントト并ニ效績ノ如何ヲ未タ經驗セシヿナク且ツ防止ス可カラサル威力ノ為メ壓制セラレタルニ出テシカ太平王ノ乱ノ間賊徒ニ與ミセシ外國人ハ皆其危難ヲ己レノ身ニ擔當シ其所為ニ付キ敢テ罵然トシテ呼噪スルヿナク千八百六十

五年夫ノブルゼウサン氏カ捕獲セラレシ時於
カ本國ヨリノ差圖ヲ受クル迄同氏ヲ浮虜ト為
シ置キシ所以ハ同氏ハ嘗テ支那官軍中信頼
受ケシ士官ニシテ後之ニ反テ賊徒ニ與ミセシ
支ニ回リシノミ然ルニシワード氏ノ差圖ニ同
氏ノ罪判然トナリシ上ハ之ヲ支那人ニ引渡ス
可ク然レモ其引渡シハ我國ノ名譽ヲ辱ヤシメ
サル為メ我曹ノ承諾ノ上之ヲ為スニ在リテ條
約ノ箇條ニ定メシ支那人ノ當然ナル權利ニ因
テ之ヲ為スニアラサル旨ヲ解セシム可シト言

ヘリ(余カ第三号書翰及ヒ千八百六十五年十一
月六日シワード氏ノ第七号書簡ヲ參考ス可
シ)
余案スルニ米國人ノ他國ノ兵籍ニ入ルヲ防制
スル律法アラサルニ因リ各人隨意ニ他國ノ兵
籍ニ入ル可キハ元來耶蘇教各國ノ間ニ定ムル
所ニシテ若シ然ル時ハ已レカ本國ノ籍ヲ全ク
脫スル者タリ而メ今試ミニ問フ上文ニ記スル
領地外ノ權ノ為メ米國人ノ外國人ニ使用セラ
ルヽノ姿ハ大ニ変易セルニハアラスヤ余答ヲ

言ハシ日本支那ノ両國ニ於テハ米國人ハ入籍
ヲ許ルス法則ハ設ケアラサレハ此両國ニ在ル
外國人ハ到底已レカ本國ノ籍ヲ脱スル能ハス
又日本或ハ支那ノ保護ヲ仰ク能ハサル可シ
ト
若シ甲ノ米人日本ノ兵事ニ傭ハレ乙ノ米人支
那ノ兵事ニ傭ハル、時ハ此両國ノ君主若シ止
ハヲ得サルニ至ルハ交戦ノ助援ヲ為サシムル
為メ右米人ヲ傭ヒタルモノト思做ス可ク而メ
若シ其米人ヲシテ當時米國ト和親セル國ノ攻
撃スル為メ其兵隊中ニ入ラシメントセハ其不
人須ラク其使用ヲ受クルヲ諾セスシテ右兵ノ
旗下ヲ去ル可シ然ルニ若シ此両名共ニ同シク
右兵ノ旗下ヲ去ルヲ肯セスシテ甲ハ日本ノ兵
隊ニ加ハリ乙ハ支那ノ兵隊ニ列ナリテ二ツニ兵
器ヲ携ヘ出陣スル時ハ我カ國人二名耶蘇教域
外ノ両國ノ為メ互ニ戦鬪シ双方共ニ其歆國ニ
向ヒ力盡クシテ害ヲ加フルノ際若シ其傭主ノ
處置非理ナル時ハ已レカ本國ノ保護ヲ仰クニ
至リ其姿実ニ奇異ナル可シ然ルニ余カ考スル

所ニテハ若シ日本人依然トシテ臺湾攻撃ノ處置ヲ息メサレハ数月ヲ出テスシテ右様ノ奇事起リ來ルモ計リ難シトス

千八百五十四年十二月五日ノマクレーン氏ノ布告書ハ若シ支那ニ於テ内乱アル時米國人支那ノ官兵トナルモ賊軍ニ與ミスルモ共罪科タルヘキ旨ヲ定ムル者ニシテ蓋シ此布告書ハ今ニ於テ其效アレモ日本ニ於テハ此ト同様ノ布告書ヲ発シタルヲ聞カス而メ此布告書ハ之ヲ發表セシ時ノ頃廣東鎮臺ノ其近傍ノ賊徒ヲ征討セントス為スニ付キ米人ノ之ニ應援セントスルヲ抑留スルニ其效アリテ其後又太平王ノ乱ノ時官軍ニ與ミセントスル者ヲ抑留スルモ亦其效アリ然レモワードノ兵一旦有名トナリテ同氏ノ戦死セシ後公使バーリンゲーハ支那政府ノ乞ヒニ應シブルゼウヰンヲシテ官兵ヲ指令セシメシハ右布告書ノ効力ヲ稍減少シタル處置ナリ

又英國政府ノ法則ニハ其臣民支那官軍ノ隊中ニ加ハラントセハ必ス前以テ本國ノ許

ルヲ要トス

若シ右マク、レトン氏ノ布告ト我カ國人ノ日本
或ハ支那ノ兵事ニ使用ヲ受クルノ自由(但シ現
今其禁ナキカ故ニ古ノ自由アルカ如シ)ト相抵
觸矛盾セハ速カニ何ト欲貴下ノ差圖アランヿ
ヲ期望スル所ニシテ先ツ目今ノ所ニテハ此二
者互ニ抵觸スルカ如キ姿ヲ為セリ偖又千八百
七十三年四月三日ノ貴翰ハゼチラールレゼン
ドル一名ノミヲ管シタレモ同人ハ方今米國ノ
職役ヲ奉セサルカ故ニ日本ノ求メニ應スレモ

自由タレハ嘗テ支那官吏ヨリ余ニ米國士官ノ
支那ニ向ヒ交戰ノ役ニ使用セラルヽヲ論セシ
時右ノ旨ヲ答ヘ置キシカリユウテナント、コム
マンドルトウグラス、カッツル及ヒマジョルワッ
ソンノ二名ハ余カ案スル所ニテハ當今彼國
ノ海陸軍籍ニ在ル輩ナレハ余ヨリ支那官吏ニ
答ヘテ目下未タ交戰ニ及ハザレハ此二士官ノ
所為ハ決シテ支那ヨリ彼此論スヘキニアラス
ト言ヒ置キタリ
當今ノ形勢ニ就キ之ヲ見ル時ハ若シ日ー

ロング氏カ第三百二号及ヒ第三百九号
ニ想思セル如ク果シテ其圖計ヲ施行スルニ至
ラハ亜細亞洲中我等ノ居住スル地方ニ劇戦ノ
起ルヿアル可ク然ル時ハ其勝敗轉変共ニ我等
ノ大管係タルニ疑ヒナシ因テ我カ國人ノ日支
両國ニ傭使セラルヽヲ許ルス可キヤ否ヤ一事
ハ既ニロウ氏ノ書ニ之ヲ載セタレモ更ニ今又
謹ンテ貴下ノ注意ヲ希フ所以ナリ
交戦ノ時西洋各國ニ適用スヘキ万國公法ハ判
然東洋各國ニ之ヲ適用スヘカラス其各國君主

フ去ル四月八日ノ書翰ニ記スル差圖ハ當時指
示セシ特別ノ場合ノミニ限リ且ツ平和ノ時ノ
ミニ限リシ者タリ而メ又右日本ノ挙ニ加ハリ
シ米國人ヲシテ之ヲ離レシメント為ス貴下ノ
尽力ハ余之ヲ了承ス
貴下ノ書簡中ニ日本或ハ支那ノ兵隊中ニ加ハ
ル米國人ハ其危難ヲ已レ一身ニ擔任シテ承知
ノ上決志シタルニ在レハ縱令戦死スルモ政府
ハ敢テ之ヲ顧ミサル可キ旨ヲ貴下ヨリ支那官
吏ニ告ケタル由ヲ記セリ然ルニ貴下ノ其答ハ

本省ニ於テ之ヲ了承スル能ハサル者ナリ

若シ開化國ノ交戰ニ於テ別ニ異常ノ事ナク米國人ノ戰死スルヿアラハ政府敢テ之ヲ顧ミサルヿ可シト雖モ其國人ノ浮虜セラレシ者ヲ異常ノ刑罰ニ處シ或ハ殘刻ニ刑罰スルカ如キハ米國ノ敢テ之ヲ容ルサヽル所ニシテ米國ハ其國民ノ開化國戰法ニ從テ取扱ハルヽヲ欲スル所ナリ

若シ國ノ律法ヲ以テ其國人ノ外國ノ職務ヲ行ヒ或ハ外國ニ傭使セラルヽヲ禁セサル時ハ縱令モ幾何程右ノ公法ヲ採用ス可キヤ其限界ニ至テ常ニ頗ル困難スル所ナリ因テ余等ハ右ノ君主ヲ奬励シ以テ外國ノ巧妙学識廉潔ノ道ヲ活用シテ其裨益タラシメ我カ技術開化ニ臣テ其実利ヲ得セシメント勉ムル所ナレハ其君主等已レカ新ニ得シ其力ヲ用ルニ熟スルニ至ラハ恐ラクハ又其敵ニ勝ツ為メ己レカ力ヲ活用ス可シ謹言

千八百七十四年五月廿九日

ウヱルス、ウヰルレムス

北京米利堅公使館ニ於テ

（七月十八日落手ス）

○

第百七十四号

第百四十七号○フィス氏ヨリウヰルレムスヘ贈ル書簡

此回日本ニ於テ臺湾生蕃征討ノ擧アリシニ付キ第三十四号ノ貴翰ニ記スル処ト貴下ノ支那官吏ト談判シ給ヘル趣トニ管シ余今貴下ニ答

其人ノ使用セラル、國ト米國ト和親セル國トノ間ニ交戰ノ起ルヿアリモ本省ノ説ニテハ其人必スシモ之レヿ為メ右ノ使用ヲ受クルヲ肯セサルニ及ハス又其一旦入リタル海陸軍ノ籍ヲ去ルニ及ハス

此ノ如キ事柄ノ生シ來ルハ稀有ノ事ニ非スシテ既ニ米國内乱ノ時モ各國ノ人民来テ或ハ北部ニ與ミシ或ハ南部ヲ助ケ又政羅巴各國ノ内乱ノ時モ亦之ト同様ナリシヿ敢テ稀ナリトセス

余思ヘラク領地外ノ権ノ説ノ如キハ國ノ律法
ニ米人ノ外國ニ傭ハルヽノ禁アラサル時ハ其
傭使ヲ受ク可キ権利ノ差支トナルヿナク又耶
蘇教ヲ奉セサル國ト傭使ノ契約ヲ結ヒタルモ
敢テ其契約ヲ法ニ背キシ者ト為ス可キニアラ
ス蓋シ支那ハワード及ヒブルゼウヰンノ二名
ニ於ケルカ如ク米國人ヲ傭入レニ已レノ益ヲ
為サシメシ既ニ数回ニ及ヒタレハ縱令本政
府ニ於テ其國人ノ法律ニ背クヿナク外國ノ兵
籍ニ入ルヲ防制スル為メ之ニ干渉スルヲ諾セ
サルモ支那ヨリ本政府ニ向ヒ強テ之ヲ論ス可
キノ權ナシ
千八百六十年六月廿二日ノ律法ノ所定ハ若シ
之ニ違背スル者アル時ハ米國公使ニ布告又ハ
差シ紙ヲ発出シ或ハ然ノミナラス威力ヲ以テ
之ヲ抑制スルノ全權ヲ與ヘタリ故ニ此ノ如キ
場合ニ於テハ公使ノ授カリタル權力ヲ以テ其
處置ヲ為スニ適當ナリト思ハル
又本省ニ於テ陸軍省ヨリ受ケシ公報ニ據レハ
臺湾出兵中ニ加ハリシ由ノワッソン氏ハ千八

百七十二年七月一日以來米國ノ職務ヲ奉スルイナシ謹言

千八百七十四年七月二十九日

華盛頓外務省ニ於テ

ハミルトン、フイス

○

第百七十九号

第百四十九号○フイス氏ヨリウヰルレムス氏ヘ贈ル書簡

余貴下トアベリー氏トノ心得ノ為メ米國人ノ日本臺湾ノ擧ニ加ハリシイニ付キ本省ヨリ上海在留米國総領事ジョージ、エフ、シワード氏ヘ送レル本月二十六日附ノ第四百九号ノ指令書ノ寫シヲ別紙トシテ貴下ニ呈ス謹言

ハミルトン、フイス

千八百七十四年八月廿九日

華盛頓外務省ニ於テ

○

第百八十号

第百五十号○フイス氏ヨリウヰルレムス氏
ヘ贈ル書簡

余貴下トアベリー氏トノ心得ノ為メ其地ニ於
テ米國ト尓餘ノ西洋各國ト互ニ助力スルヿニ
付キ日本在留米國公使ジョン、アヽビンガム氏ヘ
送リシ本月二十六日附第六十五号指令書ノ寫
シ并ニ別紙一通ヲ貴下ニ呈ス謹言

ハミルトン、フイス

千八百七十四年八月廿九日
華盛頓外務省ニ於テ

第百八十一号

○

第百五十一号　フイス氏ヨリウヰルレムス
氏ヘ送ル書簡

去月三十日附第百七十九号ノ余カ書翰ニ記ス
ル趣ニ付キ凡ソ領地外ノ権ヲ許ルセシ各國ニ

在留スル米國公使ニ權力ヲ附與セシ千八百六十年六月廿二日允許ノ律法ノ事ニ管シ日本在留米國公使ジョン、アヽビンガム氏ヘ送リシ去ル六月六日ノ指令書ノ寫シヲ貴下ニ呈ス謹言

千八百七十四年九月一日

華盛頓外務省ニ於テ

ハミルトン、フイス

第百五十二号　○ウイルレムス氏ヨリフイス氏ヘ送ル書簡

去月二十二日(第五十五号)ノ書簡ヲ貴省ニ呈セシ以後今ニ於テ名湾一件ニ付キ当府ニ在ル日本公使ト支那ノ官吏トノ間ニ何事ヲモ決定スルヿナク而シテ長キ激論ノアリシハ既ニ數回ニ及ヒタレ𪜈今以テ事ノ決セサル所以ハ江戸ヨリ全權ヲ委任セラレシ新使節ノ未ルヲ待ツニ在リト思ハル蓋シ夫レ迄ノ時間ハ両國互ニ其兵ヲ招募シテ交戦ノ用意ヲ爲スニ勉メ又海岸ノ人民ハ重ニ支那文ノ新聞紙ニ三箇ノ流布スルヨリシテ此事ニ付キ熱心ヲ発シタリ然シ

余カ固ク信スル所ニテハ此北京政府ハ敢テ戦ヲ
好マスシテ日本人臺湾ヲ退去セハ其生蕃ノ向
後更ニ暴行ヲ為スヲ制スヘキ處置ヲ為サント
用意セリ
厦門及ヒ上海ノ領事等ゼヲラールレゼンドルル
ヲ捕ヘテ之ヲ釋ルシタル事ニ管セシ各重大ノ
條件ハ既ニ貴下ノ聞知シ給ヘル可ナル可キカ
故ニ右領事官ノ此事ニ付キ記セシ諸件ハ余又
此ニ之ヲ贅セス蓋シワード氏ハ右ノ事ニ付
キ第七百九十七号ノ書簡ノ寫シヲ余ニ贈リタ
リシカ余今此ニ此寫シノ事ヲ言ヘル所以ハ去
月三十一日余カ同氏ヘ贈リシ返書中ヨリ抜萃
セシ左ノ短文ヲ辨明センカ為メナリ
抑々此田ノ一件ヲ通覧シ且ツゼヲラールレ
ゼンドルカ仲立ノ法ヲ破リシ罪ヲ証スヘキ
証人ヲ得ルヿノ難キニ因リ以テ之ヲ看ル時
ハ余思ヘラク貴下同氏ヲ釋放スルノ外敢テ
他ニ詮方ナカル可シ而メ又其罪ヲ吟味スル
為メ同氏ヲ日本ヘ送致スルモ其罪條ヲ証シ
又ハ其証人ヲ出席セシムルノ難キハ当地ニ

於ケルト同様タル可シ然レ氏一旦同氏ヲ捕獲シタルニ因リ吾曹ノ條約定規ヲ循守セント欲スル意ヲ支那人ニ知ラシムルノ益アリシナリ

余今厦門在留日本代領事吳碩氏ノ論文ノ寫シヘンテルソン氏ノ答書ノ寫シ此事ニ付余カヘンデルソン氏ヘ贈リシ書簡ノ寫シ（六月一日ニ日三日附ノ者ナリ）及ヒゼチラールシゼンドルノ論文ノ寫シ（第四号別紙）ヲ別紙トシテ貴下ニ呈シ以テ貴下參考ノ便ニ供セントス蓋シ右ノ論文中ニハ萬國公法中ノ著シキ條件一両箇アリテ其條件ハ余カ恵頓所著ノ萬國公法ニ就キ以テ之ヲ看タル所ニ據シハ尓餘ノ公法書ニハ之ヲ詳論セサル者ナリ抑々欧羅巴ニ於テハ外國人ニ領地外ノ權ヲ授クル國ハ獨リ土耳其ノミニ限リタレハ土耳其ノ使節欧洲大陸ノ如何ナル部分ニ至ルト雖モ自國ト同シキ法則ノ行ハルヽ國ノ境界内ニ入リテ障礙ヲ被破ルノ患ナシ故ニ他國ノ領地ニ到シル土耳其國ノ辯理使臣ノ自身位特權等ノ疑ヒ

ハ決シテ起来ルヘキノ恐アルヿナク而メ又土
耳其ハ其外國ヘ派出スル欽差ノ職ニ任スル為
メ外國人ヲ使用スルヿナカル可ク殊ニ自國ト
同様外國人ニ領地外ノ權ヲ許ルセル國ニ派出
スル為メ敢テ外國人ヲ選任スルヿナカル可キ
カ故ニ欽差使臣ノ其本国ノ管轄ヲ免除セラル
ヽヤ否ノ論ハ此ニ於テ起リ来ルヘキノ恐レナ
シ

ゼチラー心レゼンドルノ一件ニ付テハ日本領
事官同氏ノ日本交際辯理官タル特權アルニ基
キテ其本國有司ノ管轄ヲ免除セラル可キ旨ヲ
要メ而メ余カ初メテ聞知セル処ニテハゼチラ
ーレゼンドルハ支那ニ派出セル日本皇帝陛
下ノ特別委員ナリト言フト雖モ同氏ノ日本ヲ
出立スル前ニ「ニカド」ノ政府ヨリ日本ニ在ル米
國ノ公使館ニ右ノ旨ヲ報告セシヿナリ且ツ支
那ニ在ル日本官吏ヨリモ其旨ヲ当公使館又ハ
米國領事等ニ報告シタルヿナシ然ルニ余カ説
ニテハ支那人ノ同氏ヲ認メテ日本ノ委員ナリ
ト為スニハ先ツ日本ヨリ右報告ノ礼ヲ行フヲ

ヘ要トス可ク蓋シゼチラール レビンドルハ副
島ノ随従者トナリテ去年北京ニ来リシト雖モ
此下等ノ官職ハ此回同氏ノ任セラレタリト云
ヘル高官トハ全ク異ナレリ然リ而メ同氏ノ本
國有司ハ預メ如何様ナル事ヲ唱ヘ或ハ如何様
ナル事ヲ要ムルモ同氏ノ其委任状ヲ差出シ支
那政府同氏ヲ認メテ日本ノ交際掛リ官員ト為
ス迄ハ何人タリ氏同氏ヲ右様ノ官員ナリト看
做ス能ハサル可シト思フ所ナリ然ルニ同氏ノ
事ニ付テハ日本官吏ヨリ「ミカト」ノ同氏ヲ日本
ノ交際掛リ官員ノ職ニ任シテ之ヲ派出セシ旨
ヲ支那官吏ニ報告セシハ余カ未タ知ラサル所
ニシテ然ラハ即チ同氏カ假設ノ本籍ヲ名トシ
テ其米國領事ノ為メ捕ヘラル、ノ理ナキ旨ヲ
辯ス可カラサルナリ
此等ノ諸事ニ就キ以テ之ヲ看ル時ハ吳碩氏ノ
論文ハ其効ナキ者ニシテ同氏ハ固トヨリ其論
ヲ為ス所以ナキヿヲ決ス可ク若シ聊カタリ氏
其論ノ適宜ノ者タルヲ許認スル時ハ日本政府
ニ支那ノ平和ヲ妨ケ交戦ヲ為スタメ支那ニ在

ル米國人ヲ使用スヘキ權アルヲ許認スルニ当リ若シ真ニ然ル時ハ米國ノ領事官等其支那ニ在ル同國人ノ現ニ支那政府ニ向ヒ敵對ノ謀計ヲ為スヲ見ルモ之ヲ制シテ以テ米國ノ威勢ト地位トヲ維持スルノ權力ナク從テ條約ノ箇條ヲ破ル者アルヲ觀テ手ヲ拱セサル可カラサルニ至ル亦必然タリ

ゼ子ラールレゼンドルハ其論文中ニ固ト同氏ハ日本ノ台湾ニ兵ヲ発シ又ハ交戦ノ處為ヲ行ハサル前ニ日本在留米國公使ノ許ルシヲ得テ米國條約第十條ニ從ヒ日本政府ニ雇ハレタル

ハ此回ノ戦争中一切日本政府ノ命令ニ順ハサル可カラス言ヘリ蓋シ右條約ノ第十條ハ日本政府ニ凡ソ何事ニ限ラス當然ノ職務ヲ行ハシムル為メ米國ニ於テ(又推度スレハ他処ニ於ケルモ差支ナシ)米人ヲ雇ヒ入ル可キ權アル旨ヲ許認スト雖モ右ノ如ク雇ハレタルカ為メ一箇ノ條約權ヲ破ルモ敢テ差支ナシト為ス同氏ノ推論ハ非理ニシテ加之同氏其論文中ニ中立法ノ事ニ付キ具嘗テ当今ノ職ニ任スルヲ承若

セシ時ハ其身米國管轄ノ外ニ在リシヲ故ニ敢テ又中立法ノ為メ抑制セラル、ヿナシト言ヘルハ更ニ一層非理タル可シ何ントナレハ日本或ハ支那ニ於テハ同氏決シテ米國ノ管轄外ニ在ルヿヲ得サレハナリ

余思ヘラクレゼンドル氏ノ論文ハ悉皆其引抄スル法律ノ適用方ヲ誤解セル者ニシテ同氏ノ右條約第十條ヲ引抄スル所以ハ日本人ノ未タ支那ノ領地内ニ於テ交戦ノ處為ヲ行ハサル前ニ日本ニ雇ハレ且ツ右條約ノ箇條ハ千八百六十年六月ノ國會議院コングレスノ律法ヨリ前ニ定マリ律法タレハ其力更ニ之ニ勝レタルカ故ニ已レカ身ノ支那ニ於テ米國ノ管轄ヲ免ル可キ道理ヲ示スニ在リ然レ𪜈余カ説ニテハ日本ノ現ニ米國ト和親ヲ結ヘル國ト交戦スル際日本ニ雇ハル、ト其交戦ニ及ハサル前ニ雇ハレテ後日本ノ命ニ従ヒ其交戦ニ従事スルトノ二者ハ互ニ差異アルヿナク蓋シ顧フニ右條約所定ノ趣意ハ米國人ノ凡ソ何事ニ限ラス日本ノ領地外ニ於テ海陸軍ノ職ニ任シテ日本ノ援助ヲ為

スヲ制スルニ在ルヿ判然ニシテ初メヨリ雇入シ
ラレシ時平和ニシテ後ニ交戦ニ及ブモ當時現
交戦ヲ為スモ其雇入ラル、權ナキニ於テハ同
様タル可シ
ゼチラールレゼンドルハ右條約ノ語法ヲ変シ
テ亦其義意ヲ変セント為シタレ𪜈畢竟別段其
義意ヲ変スル能ハサル可ク因テ此ニ之ヲ言フ
ニ其條約ノ文ハ若シ日本ノ現ニ米國ト和親ヤ
ル國ト交戦スル間戦ノ禁制品ヲ(米國ヨリ)輸出
可カラス又何人タリ𪜈海陸軍ノ職ヲ勤メシム
ル為メ之ヲ雇入ル可カラス又(可カラスヲ直訳ス
デアロウ」ト未来ノ文法トナル」ナリ譯者曰)雇入レラレヌ
此文ヲ引キ「古様ノ人々ハ雇入レラレヌデアラ
ウ」ト云ヘル様其語氣ヲ変シ之ヲ牽強シテ未来
ノ意ヲ含メル文法ト為シ以テ已レカ雇入レヲ
受ケシ時期ノ論理ヲ強クシ且ツ交戦ノ前ニ雇
入レラレタル者ハ総令後ニ交戦ニ及フ𪜈猶依
然トシテ日本ニ仕フル自由ノ權ヲ失フヿナク
其交戦ノ為メ以前ニ溯テ其雇入レヲ受クル自
由ヲ妨害スルヿナキヲ証セント為セノ

又同氏ノ説ニ千八百六十年ノ律法ヲ定メシ所
以ハ米國ノ行嶮者殊ニワード及ビブルゼウサン
ノ二名支那政府ト太平王ノ徒トノ戦鬪ニ預カ
リ就中ブルゼウサンノ如キハ双方ヲ援助シタル
等ノ弊害ヲ除カンカ為メナリト言フト雖モ此
説ハ蓋シ誤リタル可シ何トナレハ千八百六
十年ニ右ノ律法ヲ設ケシ頃ハ米國ニ於テビチ
ラールワードカ挙動ヲ殆ント全ク知ルヿナシ
又ブルゼウサンカ挙動ノ如キハ千八百六十三年
ヨリ六十五年ニ及ヒシカ故ナリ

又假リニ同氏ノ説ヲ是ナリト思做シ右律法第
二十四款ノ文詞ヲ加ヘシ所以ハ果シテ元来外
國ノ内乱ノ時ニ係レルモノナリト看做スモ日
本トノ條約ヲ結ヒシハ右ノ律法ヲ設ケシ以前
ニ在ルヲ以テ其律法ニ勝レタリト為ス同氏ノ
説ハ其非理タルヿ明カナリ何レトナレハ日本
ニ雇ハレシ者其國ヲ去テ支那ニ来ル時ハ忽チ
支那トノ條約ヲ循守ス可クシテ右ノ者ハ一交
戦國トノ條約ノ所定ヲ引キ以テ他ノ交戦國ト
ノ條約ヲ破リ之シカ為メ其國ニ害ヲ被ラシム

可カラサレハナリ加之支那トノ條約ハ日本トノ條約ニ比スレハ更ニ其旧キカ故ニゼヲスールレゼンドルノ論方ニ從フ時ハ之ヲ以テ日本トノ條約ニ勝レタル者ト為ス可シ然シニ同氏ハ已レカ無根ノ信用ニ其心ヲ奪ハレ先ヽニ日本ニ仕フル約ヲ結ヒタレハ後ニ支那ニ害ヲ加フルモ其理アリト只管ニ思ヒ込ミタレハ自カラ已レノ不條理ヲ覺ユルヿナシ

同氏ハ千八百六十年ノ律法及ヒ其以前結ヒシ千八百五十八年ノ條約ノ義務ヲ論シテ「余思ヘラク千八百六十年ノ律法ハ之ヲ設ケシ者ハ元ト日本ニ適用スル能ハス又敢テ其積リニモアラサル可ク是レ蓋シ余ハ其律法ヲ設ケシ輩ノ其眼前ニ日本トノ條約ヲ見ルヿヲ得ヘキヲ知レハナリ」ト言ヒシカ此言ノ如キハ同氏カ却テ已レノ論説ヲ疑ヒ夫ノ律法ノ作者ノ意ハ右條約第十條ノ限界ヲ定メテ米人ノ当今同氏并ニカツセルワツソンノ二名カ行ヘル如キ挙動ヲ為スヲ制スルニ在リト自カラ思ヘルカ如シ此一段何ソ原文ニ脱字等ハ無之哉猶ク義意ノ疑ヲ覚申候訳者中

或人ノ説ニ千八百十八年ノ局外中立法ノ全キ趣旨ト其文詞トヲ熟考スルニ此法ハ元来米利堅領地内ニ起シル争訟ヲ規定スル為ノ設ケタル者ニシテ此法ヲ設ケシ時ハ幾ント全ク其意ヲ領地外ノ權利ノ事ニ及ホスヿアラメ且ツ條約書中ニモ其權利ノ事ヲ載スルヲ見サレハ此法ノ規定ハ支那日本等ノ如キ東洋各國ニ適用スヿ可キヤ否甚疑ハレキモノト為シ而メ此法ノ第六款ニ此回カツセル氏ノ為セル所ニ類スル挙動ヲ規定スルカ如キ箇條ノ有リト雖モ蓋シ此法ヲ設ケシ者ノ其條中ニ「管轄」ト云ヘル語ヲ用ヒシ其意ハ船中ノミヲ保含シテ言フニ在ルヿ明カニシテ当時米國人ノ其本國律法ニ従テ居住スルニアラサリシ支那等ノ外國ヲ指シ言フニアラサル旨ヲ論シタリ然リト雖モ余ハ此論ヲ至当ノモノト思ハスシテ且ツ米國議院ハ其後右論者カ近時ノ景況ニ適用スルニ必要ト思ヘル如キ新法ヲ設ケタルヿアラサレハヘンデルソン氏ノゼネラル、レゼントルニ向ヒ論スルニ右千八百十八年ノ中立法ヲ以テセンヲ至

当ト思フ所ナリ而ノ余カ説ニテハ凡ソ何人ト
雖モ右中立法ノ総体ノ趣旨ハ米國ノ中立ヲ保
持スルニ付キ現今ノ景状ニ適用ス可カラスト
固執シテ之ヲ論ス可キニ非スシテ是レ即チ此
回ノ一條ニ付テノ要件タリ
斯ク余カゼ子ラールレゼンドルノ論文ヲ詳カ
ニ分析シタル所以ハ同氏ノ論文ハ當今衆庶ノ
皆挙テ之ニ注意スルモノニシテ新聞紙ハ却テ
同氏ニ左袒スルカ如キ姿ヲ顕セル因レリ而
メ同氏カ右論文中ニ方今現ニ日支両國間ニ交

戦ノ始マリタルヤ否ヲ毫モ記載セサル所以ノ
者ハ同氏若シ現ニ交戦ノアラサル旨ヲ確言セ
バ衆庶皆必ス同氏ノ特別委員トナリテ当地ニ
来リシハ蓋シ何等ノ事業ノ為スタメナルヤヲ
疑ヒ問フ可キノ恐ヲ懐ノニ因ルナル可シ而メ
同氏ニ左袒スル新聞紙ノ頗ル勉労シテ編輯セ
シ箇條中ニ曰ク「此回ノ如キ場合ニ於テハ當テ
交戦ノ始マラサル前ニ日本ニ雇ヒシ米人ヲ交
戦ノ始マリシ後猶雇続ス可キノ權ナシト米國
ヨリ日本ニ向ヒ論駁ス可カラサルハ猶台湾征

討ノ兵ヲ発セサル前ニ日本ノ買入レシ兵器弾
藥兵船等ヲ右兵出立ノ後ニ用ヒタルカ為メ米
國ヨリ日本ニ向ヒ之ヲ取戻サントス要ムルカラ
サルト同シト蓋シ顧フニ若シ米人ノ右様ノ挙
動ヲ為スヲ防禦スベキ義務ヲ保含セル條約ヲ
支那ト取結ヒシアラサレハ右ノ説モ亦至当
ナルヘシト雖モ今現ニ此ノ如キ條約ヲ結ヒタ
ルニ因リ右ノ説ハ其当ヲ失ヒシモノト為ス可
シ

ゼヲラールレゼンドル釋放ノ事ニ付テハ案ス
ルニ同氏ノ領事ヘンデルソン氏カ引抄セシ律
法ヲ破リシ確証ナク且ツ支那及ヒ日本ニ於テ
其証人ヲ得ルヿ極メテ難キカ故ニシワード氏
ノ同氏ヲ釋放シタルハ其處置ノ宜シキヲ得タ
ル者ナリ謹言

ウエルス、ウサルレムス

千八百七十四年九月三日
北京米利堅公使館ニ於テ
（十月二十九日落手ス）